

# アメリカン・ボード宣教師文書

——同志社女学校女性宣教師を中心として——

〈M. F. デントン書簡一訳および註〉(1)

坂 本 清 音 監訳  
檜 本 尚 美  
小 島 紀 子  
秋 山 恭 子  
松 波 満 江  
杉 野 マリ子  
矢 吹 世 紀 代  
阪 上 敦 子

## Preface

The following is an annotated translation of correspondence between Mary Florence Denton (1857-1947) and Nathaniel G. Clark (1825-1896), Corresponding Secretary of ABCFM. As a missionary, Denton devoted 60 years of her life to the Christian education of Japanese women at Doshisha. In her later years, she was honorifically called “Doshisha Treasure” because of her wholehearted dedication to and unsparing love for Doshisha.

Four biographies of Denton have already been published (one in English and the others in Japanese). However, they are mostly based on personal memories and documents found in Japan, and include only a few references to her correspondence with the American Board and the Woman’s Board, the organizations which sent out missionaries like Denton to foreign countries.

Recently, researchers are interested in the missionary as a cultural agent, because he or she cannot evangelize people in different cultures without cooperating with them. The letters of Denton and N. G. Clark

translated here reveal many phases missionaries had to go through on the field. These primary materials also shed new light on Denton's life in Japan.

We hope that our translation may help many people to get to know Denton, and also help approach her from various angles and develop their research from a fresh aspect.

## はじめに

同志社女学校のキリスト教女子教育に関して、創設期に種をまいたのが A. J. Starkweather (1849-?) だとしたら、以後60年にわたってその種を養い育てた女性宣教師は、M. F. Denton (1857-1947) であることに異論をさむ人はいないであろう。

幸いミス・デントンに関しては、追悼集『ミス・デントン』(同志社同窓会 1953年)を始め、3種類の伝記〔① F. B. Clapp, *Mary Florence Denton and the Doshisha* (同志社女子大学 1955年) および、その翻訳書『ミス・デントン—「同志社の宝」と呼ばれた女性の60年—』(同志社女子大学・同志社同窓会 2007年)、② 中村貢『デントン先生』(同志社女子大学 1975年)、③ 小野恵美子『日米の懸け橋—日本の女子教育に捧げたデントンの生涯—』(大阪書籍 1988年)〕と、さらにもう1冊、太平洋戦争中のドキュメンタリーとして、銅銀松雄『デントン先生と一警察官』(刊行推進会 1975年)が、それぞれ単行本として出版されている。

また、日比恵子、坂本清音によるアメリカン・ボードやウーマンズ・ボード宛の直筆の書簡や報告書を基にした、数編の論文や資料紹介的なものはあるが、今後の研究者に役立つための第一次資料集のようなものは、まだ公開されていない。

そこで、これまでスタークウェザー書簡の翻訳に取り組んできた、同志社女子大学英語英文学会に連なるメンバーが、2013年の春から、次はデントン書簡に註を付けて翻訳することに着手した。今回は、同志社大学人文科学研究

究所ならびに同志社大学総合情報センター所蔵のマイクロフィルムの中から、MS を活字化し、資料集として公刊することも視野に入れている。それには、私たちの仲間であった故日比恵子の思いの継承を、という願いが、みな的心を結びつけたということもある。

さて、60年間同志社の女子教育に捧げた一人のアメリカ人女性の生涯は、前記書物を読めば、「同志社の宝」と表現されることが最も相応しいものであったことはよく分かる。特にミス・デントンの場合、生来の性質によることも大いにあるだろうが、自分のフィールドだと焦点を定めると、とことんそれを愛し<sup>1</sup>、全力を投入してそのために働くので、彼女の一生懸命な言動は相手の心に届き、相手に強烈な印象を残し、忘れられない影響を留める。教育という観点からみれば、それは大変重要な資質であり、彼女から受けた感化は忘れ難く、卒業後の自分の生き方はミス・デントンがあってこそと、述懐する生徒の例は幾人も挙げられる。

一方、ミス・デントンの生き方の根本には、キリスト教の神に対する確固たる信仰があり、同じ思いで彼女の働きを支えた家族、友人、団体等々の支えがあったことを忘れてはならないだろう。そのために彼女は来日したのであったし、そもそも、伝道者の思いの根底にキリスト教の伝播という使命があったことは自明のことである。しかし、それを受け入れる伝道地には独自の文化があり、土地の伝統を背負った人々がいることも現実である。従って、伝道活動は決して一方的に行われるものでなく、相互作用の産物であり、宣教師を文化エージェントと捉えて評価しようとする研究も近年は多く見られる。とすれば、対象を愛するあまり、一方的にその中に自分を没入し、自分と周りを客観的に見ること、自分を相対的に見ることが難しくなっていったミス・デントンの場合、彼女のアイデンティティはどう説明されるべきかは興味深いテーマとなる。

今後、彼女の抱えていた矛盾・撞着を含めて、より深い人物像を明らかに

するために、様々な論点を立て、多角的な方面から彼女を分析することが肝要となるであろう。そのために、このデントンに纏わる第一次資料の集大成が役立つことを願ってやまない。それは『アスフォデル』第45号から49号にかけて掲載の機会を与えられた初代宣教師 A. J. スタークウェザーの場合も同様である。

なお、① アメリカン・ボードとウーマンズ・ボード ② 前記ボードと同志社および女学校との関係 ③ 宣教師文書の意味と重要性については、『アスフォデル』45号、283—286頁を参照されたい。

1. ミス・デントンは「世界で一番善い国は日本、日本で一番善いところは京都、京都で一番善い学校は同志社、同志社の中で一番善いところは女子部」と言って憚らなかつた。

〈デントン書簡 437〉 【樫本尚美 訳】

カリフォルニア州グレンデール

1888年5月14日

拝啓 クラーク博士<sup>1</sup>

親愛なる友人

ご親切なお手紙と嬉しいお言葉に感謝申し上げます。ゴードン博士<sup>2</sup>ご一家と一緒に住めなくなったことに大変がっかりしています。また、太平洋ウーマンズ・ボード<sup>3</sup>宣教師として、出来る以上のことを期待されているのではないかと心配です。私にできることは、子供たちを教えることだけですから、宣教師ではなくて「教師」と呼ばれるつもりでございました。どんな支度をして行ったらいいのか等に関してお教え頂けると有難いのですが。ゴードン先生のお宅に住めないのなら、家具は買って持っていきましようか。およそどんな仕事が割り当てられて、生活費はどれ位になるのでしょうか。10月より前に出国の準備はできると思いますが、それでも、10月まで待つ方が賢明なのでしょうか。

ミス・ダッドレー<sup>4</sup>からの手紙に感謝しています。それに従って、衣服を整えていきます。オルデン<sup>5</sup>博士に親切なお手紙のお礼をお伝えください。この大事業のお手伝いをするために、神様の恩寵、そして能力に欠けているということにならないようにと祈ってください。6月11日頃に学校<sup>6</sup>は終業します。それ以後、住所はパサデナ私書箱111号となります。

再び感謝を込めて

敬具

フローラ・デントン

1. Clark, Nathaniel G. (1825-1896) アメリカン・ボード総主事。1865年から1894年ボードを引退するまで外国通信部の全責任を引き受けた。クラークの行政の最も顕著な特徴の二つは、日本ミッションとウーマンズ・ボードの開設である。
2. Gordon, Marquis Lafayette (1843-1900) アメリカン・ボード宣教師。南北戦争従軍後、アンドーヴァ神学校に入学。1870年に卒業し1872年来日。任地は大坂。新島とはアメリカで知り合っており、帰国後、新島は川口居留地そばの雑居地にあったゴードン宅に寄宿。京都府顧問であった山本覚馬にゴードンが中国語のキリスト教入門書『天道溯源』を贈ったことは有名。1879年から同志社（京都ステーション）に移り、99年まで同志社神学校で教えた。1886年2度目の帰国の折に、子どもたち（Fanny と Mary）の学校の教師をしていたデントンと出会い、同年4月にはアメリカン・ボードのクラークに、宣教師としてデントンを紹介した。
3. Woman's Board of Missions of the Pacific 1810年創立のアメリカン・ボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions）と協働して活動する3つの女性団体（創立年は、東部1868年、中部1868年、太平洋1873年）の一つで、同志社女学校の女性宣教師（スタークウェザー、デントン、クラップら）を支援した。
4. Dudley, Julia E. (1840-1906) 1873年3月、タルカット（Eliza Talcott）と共に、アメリカン・ボードから日本に派遣された最初の独身女性宣教師。神戸ホーム（神戸女学院）および神戸女子神学校の設立に尽力した。
5. Alden, Edmund K. アメリカン・ボード幹事（1876-93）、運営委員（1869-76）。
6. ミス・デントンが来日前に校長として教えていた学校名 'Sepulveda district school' が、現地在住の卒業生石橋朋子〈1992年英語英文学科卒〉の尽力により、

初校校正中（2014年5月）に判明した。‘Miss Flora Denton, an accomplished lady who afterwards entered the Foreign Mission field over in China [Japan], succeeded Miss Quesnel with Mr. W. C. Hayes as assistant.’ (John Calvin Sherer, *History of Glendale and Vicinity* 1922) による。Quesnel は1886年に Sepulveda district の校長であった。

〈デントン書簡 438〉 【小島紀子 訳】

カリフォルニア州グレンデール

1888年6月11日

拝啓 クラーク博士

2通目のお手紙を出す前に、ゴードン博士<sup>1</sup>から便りがあればと待っていたのですが……

私の学校は今月15日に終わります。そして、すぐに準備を始めるつもりです。出発が10月では遅すぎないでしょうか。学校は多分9月に始まるでしょうし、開始時にはそこにいたいのです。

来週ワクチン接種をしようつもりです。

真鍮の枠組の付いたスプリングベッドだけを日本に持って行き、その他のものは日本で手に入ると当てにしていいたいでしょうか。ベッドの枠組がどれぐらいするのか見当が付きませんが、法外な値段ではないと思います。

友人は、私が母とゆっくり過ごすためには、家に帰る前に洋服類を全て縫っておく方がいいと言います。このため、母のところへ行く前に荷物の船積みができるように、赴任地と時期だけでも知りたいのです。

ボードとの金銭的契約関係について、未だきちんと理解していません。給料はもらえるのでしょうか。もらえるなら、いくら位で、いつから支給は始まるのでしょうか。日本語をマスターしたあとでしょうか。

今週以降の住所は、バサテナ私書箱 111 になります。ご親切で役に立つ提案に大変感謝しています。どうかお祈りの中に私の名前をお忘れにならないよう心からお願い申し上げます。

敬具

フローラ・デントン

追伸：もしそれが最善だとお考えなら、私は準備を急ぎ、8月初め、または7月下旬にでも出発できるようにします。仕度金について、まだ太平洋ウーマンズ・ボードから何の連絡ももらっていません。

F. D.

1. ゴードン博士 前出〈437〉。

〈デントン書簡 439〉【秋山恭子 訳】

パサディナ 私書箱 111

1888年7月12日

拝啓 クラーク博士

友人と山を巡る小旅行に出かけて留守にしており、数週間お手紙が届かない状態でした。昨夜帰宅した折に、6月22日付のお手紙と小切手150ポンドを受け取りました。

休養をとって元気になりました。日本に向けての準備は、まだ順調に進んでいませんが、すでに始めています。友達も大変協力してくれます。今日ミス・フェイ<sup>1</sup>とフリント氏<sup>2</sup>に手紙を書くつもりです。友人たちは私が8月30日以前に船に乗る予定は立たないだろうとみていますが、それでよければ、その日〔8月30日〕を出港日に決める積りです。連日ゴードン夫人<sup>3</sup>からのお便りを待ち望んでいます。

有益なお手紙と寛大なご送金に心より感謝申し上げます。お金は大切に取扱います。サンフランシスコで必需品を購入するつもりです。

朝の便に間に合うように急いで手紙を書いているところです。

長らくのご無沙汰でご心配をおかけしていなければいいのですが……今朝になったら電報を打とうと昨夕は考えていました。ご理解いただけるでしょ

うか。

まずは御礼まで。

敬具

感謝をこめて

フローラ・デントン

1. Fay, Lucy 太平洋ウーマンズ・ボードの第3代会長 (1883-1889)
2. Flint, E. P. アメリカン・ボードのサンフランシスコ駐在のエージェント。本文中では、営業部長 (the Business manager) の肩書が<sup>3</sup>付いている。
3. Gordon, Agnes Helen (1852-1940) M. L. Gordon の妻。夫 Gordon と共に1872年来日。1899年夫と共に離日しているが、1900年に夫と死別。翌1901年には、結婚して日本に住んでいた2人の娘 (長女 Fanny はアメリカン・ボード宣教師 S. C. Bartlett 夫人、次女 Mary は聖公会主教 C. S. Reifsnider 夫人) を頼って再来日した。夫の生前も没後も、日本で女性と子供に対する活発な伝道活動をし、みなに愛された。1940年離日。

〈デントン書簡 440〉 【松波満江 訳】

カリフォルニア州パサデナ

1888年7月31日

拝啓 クラーク博士

フリント氏<sup>1</sup>にあなたのお手紙を提出しました。9月出港のお仲間<sup>2</sup>に加わることが出来れば嬉しく存じます。ここ数日とても喜びに満ちていますので、日本行きを待つ日々が長引いたことを感謝したいほどです。

ゴードン夫人<sup>3</sup>から受け取ったばかりのお手紙とミス・リチャーズ<sup>4</sup>の短信を同封いたします。

ミス・フェイ<sup>5</sup>の住所をご存知でしたら、転送をお願いいたします。私が最後にお便りをもらったのは、彼女がローウェルにいた時のものなので。

敬具

フローラ・デントン

パサデナ 私書箱 111



1. フリント氏 前出〈439〉。
2. 実際デントンは、1888年9月8日にサンフランシスコを出港したと語っているが、9月中の正確な日付は不明。しかし、その年の10月8日に京都に到着しているので9月出港の船で出発したのは確かである。
3. ゴードン夫人 前出〈439〉。
4. Richards, Linda Ann Judson (1841-1930) アメリカで最初の有資格看護婦。ニューヨーク州アントワープ生まれ。マサチューセッツのニューイングランド婦人小児病院で看護教育を終え、卒業するとベルビュー病院の夜間監督となり、1874～1877年までマサチューセッツの総合病院看護学校で教育にあたった。1877年より英国に渡り、ロンドンの聖トマス病院、キングス・カレッジ、また、エディンバラ王立病院などで再訓練を受け、フローレンス・ナイチンゲールからも薫陶を受ける。  
     帰米後、ボストン市立病院婦長として働いていたが、アメリカン・ボードが日本で働く看護婦を募集していることを知り、1886年職を辞して来日。京都看護婦学校・同志社病院において宣教医ベリーと共に日本における近代看護の発展に大きく寄与した。傍ら、日曜学校やバイブルクラスなど伝道活動にも従事した。彼女からの短信の中で、京都ではリチャーズと共に住むことが示唆されていたのかもしれない。
5. ミス・フェイ 前出〈439〉。

〈デントン書簡 441〉 【杉野マリ子 訳】

日本 京都

1888年10月22日

拝啓 クラーク博士

申込書<sup>1</sup>に記入した項目はどうぞ印刷なさらしないで下さいませ。それを何よりも心配しております。

同封しましたのが、旅行にかかった費用の明細です。汽船は嵐の夜暗くなってから神戸に到着しました。ミス・ダッドレーは、私が部屋に引き揚げた後でホテルに到着されたので、新任者が宣教師の方々からどれほど温かい歓迎を受けるかを体験できなくて、残念なことをしました。横浜に [アメリカン・ボードの] 代表がいないのは、とても残念なことです。ヘンリー・

ルーミス牧師<sup>2</sup>ご一家には、とりわけご親切にして頂きました。

航海中、私はほとんど個室にこもっておりましたので、船のボーイさんたちが始終気にかけてくれ、とてもお世話になりました。サイト氏<sup>3</sup>の助言にしたがって、心付けは、女性客室係に5ポンド払いました。わずか6回位しか食堂に行けなかったので、多過ぎはしないと考えました。乗客係には、1.5ポンド、ボーイさんには1ポンド渡しました。女性給仕には2.5ポンドを見越しておくように、以前頼んでおきましたけれど、もしそれは自分で払うべきとお考えでしたら、私の口座から引き落として下さい。

私の部屋はまだ満足がいくように家具をあつらえていませんので、支度金は残っています。出来るだけ快適に過ごせるように、残金をよく計算しながら出費しようと思っています。アメリカで撮った私の写真はあまりよくなかったなので、こちらで撮って、次の便でお送りします。

男子校の方で私は毎日2時間教えています。今はもちろん僅かな事しか出来ません。少し言葉が出来るようになれば、ミス・バロズ<sup>4</sup>に市内に連れ出して頂き、仕事のやり方を教えて頂くことになっています。それにしても、この国は美しく、将来の可能性は明るいとわくわくしています。交通費はどうぞラーネット氏<sup>5</sup>にお支払い下さい。

月刊誌『スクリプナー』<sup>6</sup>の新刊をバックナンバーといっしょに、ぜひ送って頂きたいのです。12月に送って下さる本といっしょで結構です。書籍費のために支度金の一部は残してあります。良い辞書は必需品と考えています。『スクリプナー』を定期購読にすれば、バックナンバーはかなり割引になるでしょう。こちらで安く製本出来ますので、製本しないで送って下さい。

当地に来ることが出来て、本当にうれしく幸せに思っています。もうしばらくすれば、お役に立つ働きができるでしょう。

心からの感謝をこめて

フローラ・デントン

雑誌のリストを同封します。日曜学校生徒ごほうび用の、聖句の書いてある絵入りカードも送って下さい。出来るだけいろいろな種類があると助かります。生徒にあげるのではなく、スクラップブックを作るためです。2.5ポンド以内でお願いします。

〈京都からの第1便〉

1. この書簡に対する N. G. クラークの返信 (Reel 53 Vol. 124) から分かるように、デントンのアメリカン・ボードに対する終身会員申込書のこと。
2. Loomis, Henry (1839-1920) 米国長老派宣教師。1872年 D. C. グリーンの妹と結婚し、来日。横浜で J. C. ヘボン家の隣に居住し、彼は英語聖書を、妻は英語讃美歌を教えた。74年9月に横浜第一長老教会を創立、初代牧師となった。81年からは米国聖書会社の横浜支配人として奉仕した。
3. Mr. Sites 詳細不詳
4. Barrows, Martha Jane (1841-1925) アメリカン・ボード独身女性宣教師。ヴァーモント州生まれで Mount Holyoke Seminary 卒。1876年4月、スタークウェザーと同船で来日、従姉のダッドレーを助けて神戸英和女学校で働く。後にダッドレーと共に神戸女子神学校を創立、女性伝道師養成に尽力した。
5. Learned, Dwight Whitney (1848-1943) 1873年イエール大学大学院を卒業。75年に妻フローレンスと共に来日、京都ステーション所属となる。翌年4月から新島襄を助けて草創期から1928年退任帰国までの52年余、同志社の教育に尽力。専門の聖書神学、キリスト教教会史、経済学、ギリシャ語のほか、初期には数学、物理学、体操なども教えた。京都ステーションの書記・会計係を長年務めた。同志社大学初代学長。
6. *Scribner's Magazine* のこと。ニューヨークに拠点を置く Charles Scribner's Sons によって出版 (1887.1-1935.5) された2冊目の月刊誌。1冊目は、*Scribner's Monthly* (1870-1881)。第1次世界大戦までは20万部の販売数を誇る月刊誌であった。カラーのイラストを入れた最初の本。1929年にはヘミングウェイの『武器よさらば』を掲載して、発売禁止の処分を受ける。

## 〈デントン書簡 445〉 【矢吹世紀代 訳】

日本 京都

1888年11月14日

拝啓 クラーク博士

最初の年というものは常に苦難続きなのだろうと思います。日本語という複雑で難解な言語に心が折れてしまうからです。他の人たちが懸命に働いている姿を目にしながら、何も出来ない自分を見るのは辛いものです。

ミス・リチャーズ<sup>1</sup>は身を粉にして働いていて、私は彼女の身を大変案じております。今は「仕方がない」と言っておられますが、確かにその通りかもしれません。彼女は自分の休憩時間を割いてまで、看護学校生がユニフォームを縫う仕事を手伝っています。その他にも、たくさんの縫い物をかかえています。

ミス・ホホワイト<sup>2</sup>やミス・ウェンライト<sup>3</sup>各々に支給された家具調達用の支度金75ドルを私も受け取れるのであれば、その私の支度金を使って、シンガー社製の改良型ミシンを送っていただくお願いをしようと、みなで相談して決めました。とにかくミシンを送って下さい。それはミス・リチャーズにとって素晴らしい助けとなることでしょう。私が今まで大事に蓄えてきた支度金のいくらかを提供しても構いません。別会計のお金を使って、生活を楽にしてくれる贅沢品を持てるということはいずれのことですが、そういうことに使うのはよくないとお考えなら、無ければないで私たちはなんとかやっで行きます。しかしながら、ミシンは必需品です！ 他の基金から使えないのであれば、私の給料から差し引いてください。

私たちはひとつの家族、ということをお忘れなくください。私たちの所在地は同志社病院<sup>4</sup>であり、少なくとも家族手当に当たる恩恵は全部、私たちも受けるに値すると思っています。家長としての担い手の男性がいいることは認めます。でも、もし私たちが本国にいれば、男手がないということで、友人たちはいろいろと気遣い、労ってくれることでしょう。今いたる所で、

「アメリカン・ボードから」と表記されている雑誌や新聞類を目にします。リストを作られるときには、どうか私たちの家族を省かないで下さい。

私の受け持つ英語クラスの生徒の英作文をご覧になりたいと思われませんか？ その独特な表現が私を楽しませてくれることがよくあるのです。生徒の一人、ヤスオ・ヨシカワ<sup>5</sup>の手紙を同封します。それは日本人の手紙の典型例だと思えます。お世辞ばかりなのです。あなた様は読みたいとは思われないかもしれませんが、出来ましたら本国の男の子に渡るようにしてください。太平洋のこちら側の日本で、同年齢の男の子がどんな事をしているか楽しんで読むでしょう。

それにしてもいらいらします。日本語はほとんど上達しないのに、実のある仕事をやりたいと気持ちが先走るばかりなのですから。

敬具

フローラ・デントン

1. リチャーズ 前出〈440〉。デントンは京都に来たら、ゴードン家との同居を希望していたが、それが叶わなかったので、1888—89年は、リチャーズと共に看病婦学校に住んだ。
2. White, Florence (1845-1931) マサチューセッツ州アマーست生まれ。公立学校で学び、アメリカの女子教育機関で教師として長年、現場を経験していた（来日直前は Mill's College）。1888年2月に京都に到着、同志社の予備校と女学校で教え、同年9月には同志社女学校の「校長」に就任。女学校の教育の高等化、生徒のキリスト教教育に一定の成果を挙げたが、1891年に強度のインフルエンザにかかり、手足に麻痺を残して同年6月には帰国。
3. Wainwright, Mary Ellen (1862-1918) 1862年3月2日イリノイ州ダンディ生まれで、リボン・アンド・タボル音楽院で学んだ後、1887年来日、6月より京都ステーションに配属された。来日女性宣教師の中で、来日前に専門の音楽教育を受けた最初の宣教師。彼女の音楽教育のお蔭で、東京音楽学校留学生と同じ頃、同志社女学校卒業生の中から、林外浪、松田幸、山口義ら、音楽の勉強のために留学するものが出た。
4. 同志社病院と看病婦学校は隣接しており、京都御苑蛤御門前、現「KBS 京都」ビルの位置にあった。病院の方が知名度が高かったため、そう書いたのであろう。

5. ヨシカワ ヤスオ 吉川安遠 明治27年旧普通学校卒のことか。  
ミス・デントンが送った。ヨシカワ ヤスオの手紙は以下のものである。

〈443〉

October 12, 1888

Dear teacher, Miss Denton,

I am very very glad from to receive your kindly education and I have great many to thank you. But I cannot spell to thank you any more.

But I do not never forget your truly kind heart while at study while at play. Please excuse me. I am sure that God bless you.

Dear teacher, please excuse my dull heart and teach me with your kindly heart.

Your little Yasuo Yoshikawa

〈クラーク書簡 Reel 53 Vol. 124〉 【阪上敦子 訳】

1888年11月16日

デントン様

今朝、注文品のリストが同封してあるお手紙を受け取りました。京都に無事に到着されたと聞いて一同嬉しく思いますし、ステーションの方々に歓迎されたことも、すでに聞いております。授業の調整は大変うまく行った<sup>1</sup>とありますが、毎日数時間、できれば一番調子のよいときを日本語の勉強に充てるようにして下さい。日本語をしっかりと習得することで、結局はあなたの影響力がもっとも大きく確かなものになります。ですから毎日少しずつ正確に習得し、使うことで上達させてください。

日本での見聞に興味を持たれた由、とても嬉しく思いました。予想されていたこととは違うこともたくさんあるでしょう。でも大抵の若い宣教師に較べてよりも、ゴードン博士<sup>2</sup>夫妻とのお付き合いから教えてもらうことが多いだろうと思います。宣教師があらゆる面で完璧な人間ではないとお分かりになるでしょうが、もし完璧な人間なら、かえって違和感を感じるかもしれ

ません。それは大抵の私たちが思うことです。でも、お互いに寛大な心遣いや思いやりを持って耐えて我慢してくだされば、お仕事には大きな成果が待ち受けていると思います。

お問い合わせの一点、女性客室係への心付けに関してはまったく妥当な額で、多いというよりも少ない位でしょう。旅費の一部と考えても十分よいものですから、明細書に記載したままで結構です。

いろんな品の注文はスウェット氏<sup>3</sup>に廻しておきました。これからは注文品は全て、彼に直接書き送って下さい。終身会員（の申込み）は正式に受け取りました。そのような項目は決して公になることはありませんが、ファイルには残しておきたいのです。後年、そのひとの友人や経歴に関わる項目を調べたいときに、重宝するのです。

敬具

N. G. クラーク

#### 〈Denton 書簡 [441] への Clark の返信〉

1. ゴードンと同志社の間では、デントンは同志社予備校（男子校）の教師になることが期待されていた。しかし、女性宣教師を派遣しているウーマンズ・ボードの方針は、「女性宣教師の責務は異国の女性のキリスト教化のために宣教師補助および教師として働く」であったので、太平洋ウーマンズ・ボードからクレームが出た。そこで、1年間だけ男子校で2クラス、女学校で1クラス教えるという折衷案で乗り切ったことを指す。
2. ゴードン博士夫妻 前出 〈437〉。
3. Swett, Charles E. アメリカン・ボードのボストン本部事務員。書物購入担当か？ 1902年頃のアメリカン・ボード発行の雑誌の年間購読申込み先が [Charles E. Swett, Congregational House 14 Beacon Street, Boston Mass.] の時期もあった。